
野球馬鹿/山獄

深海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野球馬鹿／山獄

【Nコード】

N8970A

【作者名】

深海

【あらすじ】

BLですので御注意を。ほのぼのです。獄寺の部活観戦。

放課後、グラウンドの隅で煙草をふかす俺。視線の先には野球馬鹿。

好きで見てるわけじゃねえ。10代目が居残りをしてらっしゃってて、手伝うって言っても

「一人でやらなきゃ意味がない」
と素晴らしい事を仰られた。

というわけで、俺は10代目の居残りが終わるまで暇潰しとして野球部の部活を見ている。

「あっちいー！」

「あつ、テメエッ！なに勝手に隣に座ってんだよ！」

どうやら休憩に入ったらしい。汗だくの野球馬鹿が俺んとこに走り寄って来て座りやがった。

眉尻を吊り上げて怒鳴ったって野球馬鹿には効かねえ。ヘラヘラ笑いながら額の汗を拭ってる。

「暑すぎて干からびちまいそうだな」

「んな暑い暑い言うなら野球なんて止めちまえばいいだろーが。くだらねえ」

ペットボトルのスポーツドリンクをごくごく喉を鳴らして美味しそうに飲む野球馬鹿。

額からこめかみを伝って首筋に流れる汗。光る肌。

「俺には野球しかとりえがねえんだよ……何見てんだ？」

野球馬鹿の声で、俺は無意識に野球馬鹿の横顔に見入っていたことに気付く。

慌てて顔を背け、短くなった煙草を足元に捨て踏み消す。

「……なんでもねえよ。ほら、呼んでんぞ！さっさと行きやがれ

ッ！」

野球部顧問が

「始めるぞー」

と声を上げるのを見てシッシッと手で払う仕草をする。

野球馬鹿は立ち上がると俺を見下ろして満面の笑みを浮かべる。

「二チームに分けて模擬試合やるんだ。ホームラン打ってやつからしつかり見とけよな」

その笑顔がやけに輝いて見えたのは、きっと野球馬鹿が背中に太陽を背負ってるからだ。間違いねえ。

「んなもん誰が見るか。ホームランでも内野ゴロでも勝手に打ちやがれ」

あまりの眩しさに一瞬瞼を伏せて再び上げると、野球馬鹿は既にグラウンドに向かって走っていた。

模擬試合が始まり、誰が見るかと言っておきながら俺は真剣に試合を見ていた。いや、野球馬鹿を見ていた。

時折、汗を拭う仕草。真剣な眼差し。本当に野球が好きなんだろうな。

「けっ、あんな小せえ球打って打たれて何が楽しいんだか」

なんてけなしてみるけど、野球馬鹿がバッターボックスに立つと僅かに身を乗り出している俺がいた。

「あーッ、何やってんだよ！」

一球目、見送りのストライク。俺は拳を握って舌打ちをした。

二球目。ピッチャーがボールを投げると、野球馬鹿の眼孔が鋭くなり左足を上げた。

「おっしやあッ！」

カキーンと高い音を立ててボールが飛んでいく。同時に走り出す野球馬鹿。守備の奴らは動かねえ。当たり前だろ。誰がどう見てもホームランだからな。

一塁、二塁と回った野球馬鹿が俺に向けて笑顔で手を振っている。眩しい。今度は野球馬鹿の後ろに太陽はねえのによ。

俺はつい手を振り返した。背筋を正し、伸び上がって大きく、笑顔で。

はっと我に返ると振っていた手で頭をガシガシと搔いて顔を背ける。

「何やってんだよ、俺らしくもねえ。たかが野球で興奮してんじゃないよ」

自分自身に向けて呟き、膝に頬杖を付いて野球馬鹿に視線を戻す。同じチームメイトと手を叩き合い嬉しそうに笑う野球馬鹿。

やっぱり眩しい……。

「へっ、かつこいいじゃねえか」

「うん、山本って野球してる 때가一番かつこいいよ」

突然聞こえた声に驚いて振り返ると、そこには10代目。俺は慌てて立ち上がりブンブンと両手を振った。

「い、今のは違うんすよ！別に山本の事をかつこいいとか言ったんじゃないってッ！」

「……何慌ててんの？」

不思議そうに首を傾げる10代目に、俺は言葉が詰まる。

そうだよ。何慌ててんだよ俺。

「10代目、居残り終わったんすか？すぐ帰ります？」

「うん。帰ろっか」

「はい」

浅く頷くと10代目は声を上げて笑い始めた。何事かと目を丸くしている、10代目はその場に腰をおろした。

「冗談だよ。見ていきたいんでしょ？山本が終わるまで待つてよ
うよ」

「なッ……！俺は別に！」

だけど、もつと見ていたいと思ってたのは事実みてえで、自然と顔は綻び10代目の隣に腰をおろした。

「10代目が見ていくって言うんなら俺もお供します。本当は見たくなんでないんすけどね」

「はいはい」

やがて部活が終わり、試合中にスライディングした野球馬鹿がドロドロのユニフォームで走って来やがる。

「待っててくれたのか？ 見たか？ 俺のホームラン！ かつこ良かっただろ？」

日は大分落ちて眩しいはずなんてねえのに、俺は目を細めた。

「見てねえよ、んなもん。つーか寄るな！ 汚エツ！」

「なんだよ、手え振ってくれてたじゃねーか」

「ばッ！ 気のせいだよ気のせい！ 暑さで頭おかしくなったんじやねえのか?!」

仕方ねえから認めてやるよ。

ホームラン、かつこ良かったぜ。輝いてた。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8970a/>

野球馬鹿/山獄

2010年10月9日14時43分発行